［特別活動］

児童の自主的・実践的態度の育成を目指す特別活動の取組

－学校生活の充実・向上を図る児童主体のプロジェクト活動実践を通して－

南雲江利子*

1　はじめに

１年間を振り返る作文に「私は，全校のみんなの名前が言えるようになりました。」と５年生のある児童が記した。児童が多様な異学年交流を通し，全校児童217人の名前を言えるようになったという喜びが伝わってくる。

変化の激しい社会を力強く生き抜く児童の育成を目指し，学習指導要領が改訂された。特別活動の改訂の趣旨には「自分に自信がもてず，人間関係に不安を感じていたり，好ましい人間関係を築けず社会性の育成が不十分であったりする状況が見られたりすることから，それらにかかわる力を実践を通して高めるための体験活動や生活を改善する話合い活動，多様な異年齢の子どもたちからなる集団による活動を一層重視する。」[1]とある。

土屋（2007）は「子どもたちが夢をもって，嬉々として学ぶ姿を具現化するために，学校内の様々な活動を子どもたち自身が自ら考え，計画し，工夫しながら実行する活動」[2]として「プロジェクト活動」を運動会に導入した。そして「自分自身が考え，決め，選ぶ運動会を体験した児童は，やり遂げたという達成感，充実感を得ることができた。」[2]とし，運動会という学校行事に進んで参画する児童の姿などから，プロジェクト活動の有効性を明らかにした。

当校でも２年前から，児童が主体的に課題を見付け課題解決を図る自主的・実践的態度を育成するため，プロジェクト活動を行っている。従来の高学年による委員会活動を廃止し，全校児童によるプロジェクト活動に移行し，学校職員で知恵を出し合いながら，実践を積み重ねてきた。初年度は，「１年生を迎える会」や「運動会」，「文化祭」など学校行事や児童集会活動で，プロジェクト活動を立ち上げたところ，児童は主体的に企画運営し，意欲的に活動してきた。

一方，行事が終わると，せっかく築かれた児童相互の関係が途切れてしまい，挨拶を気軽に交わしたり，異学年で遊んだりという交流が見られなくなってしまうという実態があった。

土屋（2010）は，「児童の学校生活の『点』である学校行事から，『線』である日常の生活に研究で意図したことを広げていくことが課題である」[3]とし，運動会など３つの学校行事でプロジェクト活動を導入し，実践を行った。「３つの活動で見られた自主的，実践的な態度が日常生活に十分生かされていくよう，特別活動だけでなく，各教科，他領域においても児童の主体的な活動を促す視点を重視して指導にあたりたい」[2]としている。

そこで，当校のプロジェクト活動について，学校行事以外の場面で年間を通して「『点』から『線』へ」と継続した取組を行うことで，学年学級を超えた児童の共感的な人間関係を築くとともに，日常生活の改善に主体的に取り組む自主的・実践的態度を育成したいと考えた。

2　研究の目的

児童の自主的・実践的な態度を育成するため，日常的な学校生活で問題解決を図るプロジェクト活動を導入し，その有効性について実践を通して検証する。

3　研究の方法

学校行事や児童集会活動に加えて，日常的な学校生活において問題解決を図るプロジェクト活動を年間にわたって導入する。その成果を児童の行動観察や振り返りカードの記述等から検証する。

4　生活目標と連動させたプロジェクト活動「ハッピースクールプロジェクト」の実施

(1)　「ハッピースクールプロジェクト」の年間指導計画の整備

表１は，当校が大きな行事等でプロジェクト活動をスタートした初年度の年間計画である。「一年生を迎える会」（４月）に始まり，「運動会」（５月），「文化祭」（10月），「６年生を送る会」（３月）の４つの大きな行事でプロジェクト活

＊ 上越市立大和小学校

動に取り組んだ。児童は行事の成功に向けて積極的にプロジェクト活動に参加し，主体的に学校の行事に参画した。しかし，表１のように４つの行事の間は，空白の期間となってしまった。

表１　学校行事に合わせたプロジェクト活動の実際

教育期	Ⅰ期（４・５月）	Ⅱ期（６・７月）	Ⅲ期（９・10月）	Ⅳ期（11・12月）	Ⅴ期（1月・２・３月）
行事に合わせたプロジェクト	「１年生を迎える会」「運動会」	← 空白期間 →	「文化祭」	← 空白期間 →	「６年生を送る会」

この年度の学校評価会議では問題点として，行事の際にプロジェクト活動で築かれた児童の人間関係が，空白の期間に途切れてしまうという点が挙がった。また，児童の学校生活の状況では，「あいさつが消極的である」，「廊下を走る姿が見られる」といった課題も見られ，児童が主体となり日常の学校生活における課題を意識し，その解決に向けた取組を推進していく必要性が出てきた。

そこで，児童自らが学校生活を見つめ直し，問題解決を図るプロジェクト活動を「ハッピースクールプロジェクト」とし実施する。学校生活を見直す視点として，月の生活目標とプロジェクト活動を連動させ，児童の主体的な活動展開や問題解決につなげることで学校生活の充実や向上について自主的・実践的態度を育成したい。そのプロジェクト活動を実施する年間計画を作成する。

⑵　異年齢集団による建設的な話合いの実施

児童主体の活動を推進する場合，多様な意見を引き出すと共に，それらの意見をまとめ具体的な方向性を明らかにする話合いが欠かせない。当校の「プロジェクト活動」の中核となる推進組織は，各学級の代表者による「代表委員会」である。１年生から６年生の児童が参加するため，様々な意見が集まる。互いの意見が共有され，方向性をもたせる話合いを成立させるためには，それぞれの学年の発達段階を踏まえた手立てが必要である。そこで，児童は各学級の意見を付箋に書いて代表委員会に持ち寄る。互いの意見が付箋により視覚化され，集約しやすくなると考えた。

⑶　プロジェクト活動展開の基本的なパターン化

全校児童がプロジェクト活動に自主的に参加するためには，どの学年でも無理なく参加できる進め方を児童に理解させる必要がある。そのため，プロジェクト活動の進め方の基本パターンを決め，どの活動でも繰り返す。経験を積み重ねる中で，児童が見通しをもって取り組めるようにする。

⑷　児童が成就感を味わうことができるようにする振り返りの実施

プロジェクト活動の終末段階で，自由記述による活動の振り返りを行う。また，児童が記入した振り返りシートを掲示し，全校児童や保護者，学校訪問者からそれらを読んでもらい成就感を高める。さらに，児童が振り返りシートを読むことで，そこに書かれたプロジェクト活動の模範的な取り組み方や異学年での共感的なかかわり方を共有させたい。

５　「ハッピースクールプロジェクト」活動の実際と考察

⑴　生活目標と連動させたプロジェクト活動（「ハッピースクールプロジェクト」）年間計画の整備と実践

①　年間計画の整備

表２は，生活目標と連動させたプロジェクト活動「ハッピースクールプロジェクト」年間計画である。学校生活の充実や向上について，児童の意識付けを図るため，生活目標と連動させたプロジェクト活動「ハッピースクールプロジェクト」の年間計画を作成し，実施した。（表２）

表２　生活目標と連動させたプロジェクト活動（ハッピースクールプロジェクト）一覧

教育期	Ⅰ期（4・5月）出会い	Ⅱ期（6・7月）仲良し	Ⅲ期（9・10月）協力	Ⅳ期（11・12月）認め合い	Ⅴ期（1月・2・3月）感謝
行事に合わせたプロジェクト	「１年生を迎える会」「運動会」	← 空白期間 →	「文化祭」	← 空白期間 →	「６年生を送る会」
「ハッピースクールプロジェクト」		「だれとでもなかよくしようプロジェクト」	「みんなのためにできることをしようプロジェクト」	「パワーアップチャレンジプロジェクト」	「サンキューファイトプロジェクト」
生活目標	友達と力を合わせよう	だれとでもなかよく遊ぼう	みんなのためにできることをしよう	やさしい言葉をかけ合おう	自分の生活を振り返ろうありがとうを伝えよう

・生活目標とプロジェクト活動を連動させた「ハッピースクールプロジェクト」をⅡ期からⅤ期まで導入した。プロジェクト活動の空白の期間がなくなり，年間を通した活動が継続した。

・各教育期の「ハッピースクールプロジェクト」活動において，その都度新規にメンバーを募集して，実行委員会やプロジェクトチームを立ち上げた。児童が自らの問題意識に応じてプロジェクト活動への参加を自己決定し，どんな活動をするのか自己選択できるようにした。
・教育期ごとに，児童相互の仲間関係の変容や成長を促すテーマ（Ⅱ期は「仲良し」，Ⅲ期は「協力」，Ⅳ期は「認め合い」，Ⅴ期は「感謝」）を設定した。
・プロジェクト活動のねらいに向けて活動することで，Ⅰ期の「出会い」からⅤ期の「感謝」までに築かれた児童相互の協力的な関係が，段階的に深まる年間計画となった。

② プロジェクト活動で立ち上がったプロジェクトチームの実際

各プロジェクト活動では，児童の話合いを通し，課題解決に向けたグループ「プロジェクトチーム」をつくる。表３はⅡ期からⅤ期に行われたプロジェクト活動で立ち上がったプロジェクトチームの一覧である。

表３　「ハッピースクールプロジェクト」で実施されたプロジェクトチーム一覧（ｔはプロジェクトチーム名）

教育期	Ⅱ期（６・７月）仲良し	Ⅲ期（９・10月）協力	Ⅳ期（11・12月）認め合い	Ⅴ期（１月・２・３月）感謝
プロジェクト	だれとでもなかよくしようプロジェクト	みんなのためにできることをしようプロジェクト	パワーアップチャレンジプロジェクト	サンキューファイトプロジェクト
各プロジェクトで立ち上がったプロジェクトチーム名	t1「あいさつ」 t2「読み聞かせ」 t3「なかよし遊びゲーム」 t4「なかよし給食」 t5「学校自慢壁新聞」	t1「あいさつ」 t2「読み聞かせ」 t3「遊び場のびのび計画」 t4「みんなで遊ぼう」 t5「節電」 t6「日本を救おう」 t7「学校をきれいに」 t8「フェスタ(文化祭)を楽しく」 t9「持久力アップ大作戦」 t10「ゴールめざして全校遠足」	t1「あいさつ」 t2「読み聞かせ」 t3「冬の遊びを楽しもう」 t4「みんなで楽しい集会」 t5「となりの学校となかよし」 t6「節水と節電」 t7「もっとなかよし給食」 t8「学校をきれいに」 t9「廊下をあるこう」	t1「あいさつ」 t2「勉強を教え合おう」 t3「６年生と遊ぼう」 t4「お別れ給食会」 t5「６年生を送る会・プレゼント」 t6「６年生を送る会・ゲーム」 t7「６年生を送る会・飾り」 t8「卒業式・思い出映像を流そう」 t9「卒業式・お見送り」
チーム合計数	5	10	9	9

・各プロジェクト活動でのプロジェクトチーム数は，Ⅱ期では５つであったが，教育期の具体的な取組内容が進むにつれ，Ⅲ期以降は10前後に増えた。
・Ⅰ期の「一年生を迎える会」では，自己紹介やゲームをして知り合い，「運動会」では全校縦割り班での種目をすることで仲間関係を築き，活動を通して学級や学年を超えた互いのかかわりが生まれた。
・Ⅱ期では，縦割り班だけでなく，異学年の交流が一層広がるように「だれとでもなかよくしようプロジェクト」が立ち上がった。
・「t1あいさつ」「t2読み聞かせ」などが，Ⅱ～Ⅴ期の間で継続して行われた。特にあいさつの取組では，児童自らがあいさつ活性化への問題意識をもち，具体的な手立ての話合いが行われた。Ⅱ期ではジャンケンの取り入れ，Ⅲ期では「〇〇さん，おはよう。」と相手の名前を付けた呼びかけ，Ⅳ期には模範的な児童を「あいさつ名人」として昼の校内放送で紹介するといった活動が展開された。全教育期の期間で継続され，児童のアイデアが盛り込まれた取組となった。
・Ⅱ期では「だれとでもなかよくしよう」というプロジェクトで「t3遊び場のびのび計画」というプロジェクトチームが立ち上がり，遊びを中心とした関わりが広がった。Ⅳ期では「t3冬の遊びを楽しもう」とⅤ期では「t3６年生と遊ぼう」など「遊び」に関するプロジェクトチームが，その時期の課題や実態に応じて，内容が分化したり統合したりしながら立ち上がり，活動が展開された。

(2) 低学年から高学年による集団における建設的な話合いの推進

児童の願いや思いをたくさん出させるため，学級の代表児童は各学級で話し合ったことを約５㎝四方の付箋に書かせる。各学級の代表児童は，代表委員会に持って集まり，学級での話合いで挙がった理由を説明しながら，大きい台紙に貼り付けていく（写真１）。次の学級の代表児童が児学級の意見を記入した付箋を台紙に貼るとき，他の学級の意見と似ている内容を近くに貼る。同様の意見や関連性のある意見が近くにまとまり，視覚的にもひと目で意見の傾向が理解できるようになる。全学級の発表

写真１　関連性に応じての付箋を貼る話合いの様子

を終えると，実行行委員が同様内容の付箋を大きな円で囲み，見出しを付けて集約していく。

６・７月の「だれとでもなかよくしようプロジェクト」での代表委員会で，話し合われた内容は以下の通りである。

C1（実行委員）：今日はどうしたらみんなが「だれとでもなかよく」し，楽しい学校になるか，各学級で話し合ってきたことを，発表してください。理由が言えるところはお願いします。６年生からお願いします。
C2（６年生）：「私たちは，仲良くなるためにあいさつが大事だと思うので，『あいさつプロジェクトチーム』をしたいです。
C3（５年生）：「ぼくたちのクラスもだれとでもあいさつをして，なかよくしようと『あいさつプロジェクトチーム」をしたいという意見が出ました。
C4（２年生）：「給食を楽しく仲良く食べると良いというので，『給食プロジェクトチーム』という意見が出ました。」
C5（１年生）：「鬼ごっことか大縄跳びをしたら仲良くなると思うので，『遊びプロジェクトチーム』です。」…以下，付箋がなくなるまで発表をしていく。

・学級で話し合った内容を付箋に記入してくることで，低学年であっても代表委員会で発言することができた。
・同様の意見の付箋を集めて貼ることで，児童の問題意識の傾向を，視覚的に分かりやすく整理することができた。
・写真２は，Ⅰ期（４・５月）の代表委員会「どんな運動会にしたいか考えよう」（行事に合わせたプロジェクト）で各学級からの意見をまとめたものである。付箋の数は多いが，「スローガン」や「応援」といった例年と同様な内容であった。

写真２　Ⅰ期（４・５月）「運動会」（行事に合わせたプロジェクト）

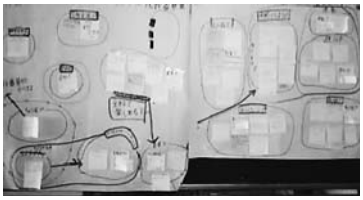


写真３　Ⅳ期（11・12月）「パワーアップチャレンジプロジェクト」（ハッピースクールプロジェクト）

・写真３は，Ⅳ期（11・12月）の「パワーアップチャレンジプロジェクト」（「ハッピースクールプロジェクト」）で各学級の意見をまとめたものである。「ハッピースクールプロジェクト」では，各学年から多様な点からの意見が出てくる。付箋に書かれた内容も豊かで，付箋を貼る大きな台紙が２枚必要になり，関係性のある項目を矢印でつないでいる。Ⅳ期ともなると，機械的に似た意見を集めて分類して終わるのでなく，「寒さによる運動の機会の減少」や「冬場の屋内の遊びの混雑」といった遊びに関する改題をまとめた方が効果的だという気付きが生まれ，「冬の遊びを楽しもう」というプロジェクトチームを立ち上がった。

(3)　プロジェクト活動の基本的なパターン化と実際

①　プロジェクト活動の基本的なパターンの整備

図１は「ハッピースクールプロジェクト」で，児童が学校生活充実と向上のために問題意識を高め，その問題解決のために主体的に活動するという流れをパターン化して示したものである。

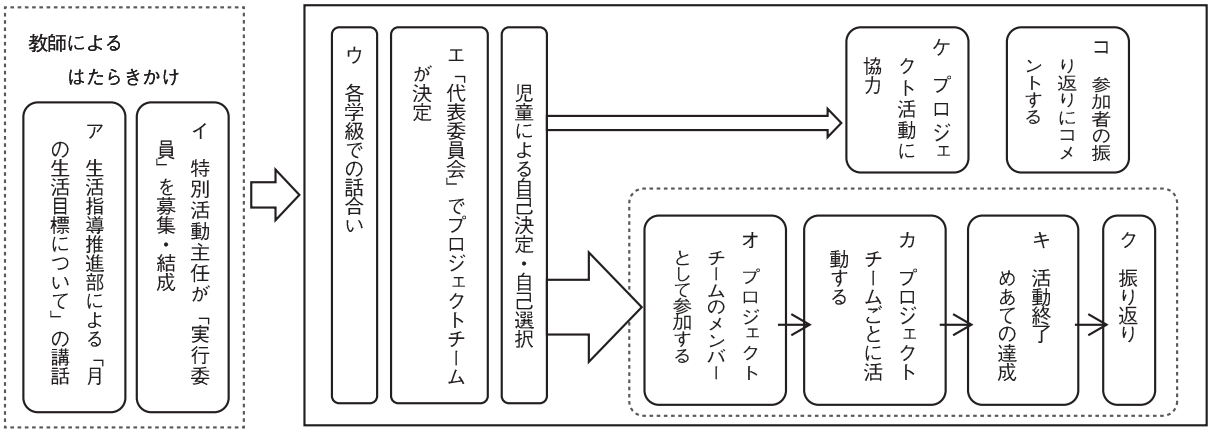


図１　プロジェクト活動の基本的パターン

生活指導担当が，朝会で全校児童にその月の生活目標を説明し，その後，実行委員が募集され結成される（ア，イ）。実行委員の呼びかけにより，各学級で学校生活の充実・向上のためにどんな取組が必要かを考え，代表委員会での話合いを経てプロジェクトチームが決定する（ウ，エ）。プロジェクトチームが立ち上がり，児童は自己選択によりプロジェクトチームに入り，チームリーダーを中心にめあてを決めて活動する（オ，カ）。めあての達成により活動が終了し，振り返りをする（キ，ク）。プロジェクトチームに参加しなかった児童は，イベントに参加し，各プロジェクトチームの活動に協力し，参加メンバーの振り返りカードにコメントをする（ケ，コ）。

・初めの働きかけは教師が行うが，イで実行委員会が立ち上がると，児童が主体的に活動を進めた。
・各プロジェクトチームには，担当の教師が具体的な活動内容や手立てについて，指導・支援にあたった。児童の発案や意欲を大切にして，助言等を行った。
・ウからケの場面で児童は，「自分は，プロジェクト活動をするかしないか」を自己選択したり，所属したプロジェクトチームで「どんな活動がしたいのか」自己決定をしたりしていった。
・キからクでは，学校生活の問題解決に向けて「呼びかけを徹底させるために，ポスターも貼ってはどうか」などという児童の個の思いや願いが，プロジェクトチームの児童の共感をよび，賛同を得て，全校児童の協力のもと実現することができた。
・どのプロジェクトでも，上記の順で活動の流れをパターン化したため，教育期が進むごとに児童は次の活動への見通しをもって，自主的に活動することができた。

② プロジェクト活動の参加率

下の図は，図２　各学年のプロジェクト参加率のグラフである。

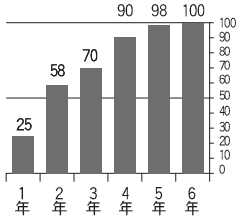
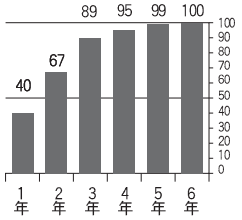
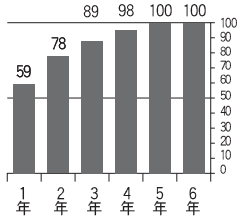
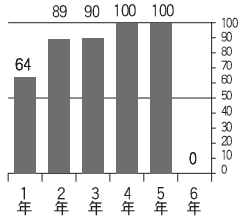
教育期	Ⅱ期（６・７月）仲良し	Ⅲ期（９・10月）協力	Ⅳ期（11・12月）認め合い	Ⅴ期（１月・２・３月）感謝
プロジェクト	だれとでもなかよくしようプロジェクト	みんなのためにできることをしようプロジェクト	パワーアップチャレンジプロジェクト	サンキューファイトプロジェクト
各学年のプロジェクト参加率のグラフ（%）				

図２　各学年のプロジェクト参加率のグラフ

・４・５・６年生の参加率は，各教育期とも９割以上ある。学校生活をよりよくしようといった意識や他学年とかかわろうとする姿が数値となって表れている。
・プロジェクト活動の流れをパターン化したことにより，１・２・３年生の参加率も教育期を追って増加している。
・５・６年生はプロジェクトの活動経験を積み重ねる中で，下学年の意見をよく聞き入れている。「毎朝，当番であいさつをしよう」「低学年でも楽しめる遊びをしよう」などとメンバーの思いが生かされるような具体的な活動を構想していった。また，集会時のあいさつや広報活動の際，原稿は高学年が作り，実際に話す場面を低学年に任せるなど，学年の発達段階に応じて，達成感を感じられるように役割の分担の調整をしていた。
・Ⅴ期になると６年生の参加が０になり，４・５年生の参加が100％となった。それまでプロジェクト活動をけん引してきた６年生に感謝し，頑張ってきたことを受け継ごうと５年生が中心となって，プロジェクト活動を展開した。６年生は各プロジェクトチームのイベント等に参加しながら，下学年との交流を楽しんだ。

(4) 児童が成就感を味わうことができるようにする振り返りの実際

プロジェクトチームの活動の終末に，自由記述により振り返りを行った。児童の記述を以下に示す。

［Ⅱ期］・初めはあいさつを返してくれる人が少なかったけど，だんだんあいさつが返ってくるようになりました。学校のあちこちからあいさつが聞こえ，あいさつ運動をがんばってよかったです。（４年生）
・帰りの会の「係からの連絡」で「なかよし遊び」でするゲームのことをみんなに教えました。本番ではゲームの説明を大きな声でがんばりました。いっぱいがんばったので，楽しかったです（３年生）
［Ⅲ期］・学校をきれいにするのはたのしかったです。６年生にほうきのやりかたをおしえてもらいました。またやりたいです。（１年生）
・読み聞かせの練習を何回もしました。読むのは得意じゃないけど，低学年がよろこんでくれてうれしかったです。またやりたいです。（５年生）
［Ⅳ期］・全校のみんなから給食の好きなメニューを聞いてランキングを作りました。ランキングをクイズにして発表するのは大変でしたが，「楽しかったよ」と言ってくれる人がいてうれしかったです。（６年生）
［Ⅴ期］・６年生にたよらず，１・２年生をリードしたりお手本になったりできました。自分のことより「プロジェクトのことを優先させて行動しました。６年生に安心して卒業してほしいです。（５年生）

また，こうした個の振り返りを共有するため，全校児童が必ず通る廊下の「プロジェクト広場」に振り返りシートを掲示した。プロジェクト参加メンバーは，振り返りカードの交流により，一層活動の達成感や成就感をもつことができた。児童は立ち止まって熱心に読み，共感や感謝の気持ちを表すコメントを書き込んだ。(写真４)

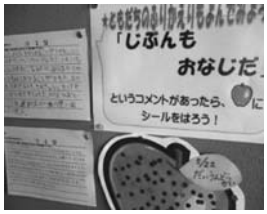


写真４　コメントをする掲示

６　まとめと今後の課題

(1)　本研究の成果

・Ⅱ期からⅣ期の教育期で，「あいさつしよう」や「みんなで遊ぼう」といった学校生活の具体的な課題を児童自らが見 付け，解決を図る「ハッピープロジェクト」の活動が展開できた。
・「ハッピースクールプロジェクト」の場合，学級での話合いの内容をメモした付箋を使うことで，建設的な意見の集約ができた。貼られた付箋の位置や枚数によって，全校児童から出された意見の内容が視覚的に理解でき，プロジェクトチーム立ち上げの際に活用することができた。
・どの教育期でもプロジェクト活動の基本パターンを進めることにより，児童が見通しをもって活動することにつながった。児童が「今週は，計画を立てよう」「来週は，全校のみんなに呼びかけよう」とタイミングを見て進めていた。
・下学年は，上学年から具体的な活動内容ややりかたを教えてもらうと，周囲からほめてもらい，充実感を味わっていた。また，これらの充実感を原動力として，次期のプロジェクト活動への積極的な参加につながっている。
・課題解決に向けた活動を通し，高学年が低学年や中学年の発達やそれぞれの思いに沿って役割を調整したり，模範となったりし，リーダーシップを発揮していった。振り返りカードの記述や全校児童の交流により，大きな成就感を味わい，様々な活動に意欲的に取り組むようになってきている。
・年間を通してプロジェクト活動を行うことで，児童の参加率も高まった。自ら課題を見付け，解決のための取組を実行したりする一連の活動を主体的に行うことができた。
・プロジェクト活動の空白期間がなくなり，「『点』から『線』へ」と継続した活動が展開できた。
・児童はプロジェクト活動の経験を積み重ねることで日常生活の改善に取り組み，自分たちで見通しをもって自主的・実践的に活動しながら，共感的な人間関係を築いていった。
・「ハッピースクールプロジェクト」では，メンバーが変わってもプロジェクト活動で築かれた良好な人間関係が育まれたと受け止める。休日に一緒に遊んだり，卒業する６年生に手紙を渡したりしている。

(2)　課題

当校のプロジェクト活動の取組は，２年目である。実践の積み上げを通して，「『点』から『線』へ」の年間活動計画がようやく整い，児童の参加率も高まってきた。

今後の課題としては，まず児童の活動時間の確保がある。プロジェクト活動の進め方をパターン化した今年度計画を基本として活用し，次年度の取組を考えていく。今年度の活動展開を参考にすることで，学級での話し合い内容を生かして，プロジェクトチームを立ち上げる過程にかかる時間を短縮したい。課題解決の話合いや，実際の取組に時間をかけることで児童の学校生活を向上・充実させようという意識を高めることにつなげたい。

課題の２つ目は，児童主体の自発的な活動への改善を図っていくことである。特に，教師から月の生活目標を投げかけてスタートしていた活動を，児童自らの問題意識や気付きを引き出すことで始められるようにしたい。数年間にわたるプロジェクト活動の児童の履歴を集積し，児童個々や学年の参加内容や傾向について，教育期や学年発達といった観点で分析することにより，児童の主体性を高めるプロジェクト活動としていきたい。

引用文献

１）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　特別活動編』　東洋館出版　2008
２）土屋雅朗『児童の主体性を育てる学校行事の取組自発的な運動会計画集団－「運動会プロジェクトチームの取組を通して」－』上越教育大学学校教育総合研究センター　『教育実践研究集17集』2007，pp199-204
３）土屋雅朗『自主的，実践的な活動を通して児童の自己実現を目指す特別活動の取組－「プロジェクト活動」を三つの学校行事に導入した実践から－』 上越教育大学学校教育総合研究センター　『教育実践研究集21集』2010，pp223-228

参考文献

・奈須正裕・諸富祥彦　『答えなき時代を生き抜く子どもの育成』　図書文化　2011